札幌烈々布（レツレップ）「大学村」周辺の歴史とその変貌

山　内　　正　明

１．消えた地名

「烈々布」も「大学村」も、もはや地図から消えてしまった地名です。烈々布は大正５年版の地形図に、丘珠烈々布、篠路烈々布とともに札幌烈々布の地名が記載されています。現在の市街地東北部の丘珠、太平、篠路、栄町一帯のかなり広範な地域を示し、「大学村」周辺も含めて、旧北大第三農場一帯を烈々布農場と呼んでいました。

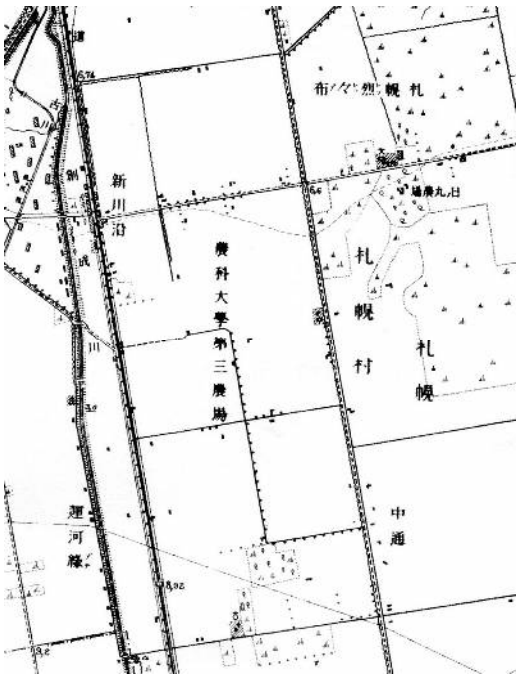

図１．大正５年版　地形図　25000 分の１

当然アイヌ語地名と考えられ、藤村久和はその語源をル・エ・トイエ・プ（道がそこで川を切っているもの）とし、*1　元村の地は、石狩と札幌を結んでいた旧石狩街道（現茨戸篠路線）によって、いかにも人為的に埋められたように切断されている。と説明しています。もしそうだとすれば旧石狩街道（通称元村街道と呼ばれていた。）は 1873（明治 6）年篠路の開祖早山清太郎によって開削されたものなので、レツレップのアイヌ語地名はこれ以後に付けられたことになります。明治初期のこの時期にあえてアイヌ語地名が採用されていたとなれば、いかにも不自然な感じがします。これが事実であれば現存するアイヌ語地名で最も新しい地名ということになります。

現に松浦武四郎の「丁巳東西蝦夷山川地理取調日誌　上」（1857（安政４）年）、永田方正の「蝦夷語地名解（1891（明治 24）年）さらにはそれまでのアイヌ語地名研究を集大成した山田秀三の

「北海道の地名」（1984（昭和 59）年）にもレツレップは採録されていません。もとより、アイヌ語地名であるかどうかも不明だったようで、明治 8 年に清国山東省から丘珠村へ入植した人が故郷の地名を採ったとの説まであったようです。したがって藤村の解釈が最も新しい説といえそうです。

とはいっても、もともと元村街道は伏籠川の自然堤防上をくねくねと屈曲しながら走る道なので、和人が入植するずっと以前から、流域のアイヌコタンを結ぶ道として存在していたとも思われます。いずれにしてもレツレップの呼称は旧元村界隈をさす地名だったようです。今は地下鉄東豊線栄町駅近くの烈々布神社（東区北 42 東 10）や烈々布公園（東区北 43 東 14）にその地名がわずかに残されています。

２．烈々布の自然

明治 29 年版の地形図をみると、烈々布一帯には篠地や荒地、闊葉（広葉）樹林のまま残された未墾の土地が多く広がっています。大正 5 年版ではその多くは畑地として開墾され、東豊線栄町周辺（北 34 条から北 50 条、東 8 丁目から 16 丁目のあたり）と大学村周辺（北 25 条から 28 条、東 3 丁目から 6 丁目あたり）に荒地がわずかに残される程度まで開墾が進んでいます。後述しますが、戦後大学村の宅地造成がこの地で行われたのはそこが農耕に不適で条件が悪く、荒地のまま放置されていた土地だったからのように思います。実は麻生団地や元町団地など昭和 30 年代に造成された本格的住宅団地の立地も同様に農耕地としては条件が悪く、生産性の低い土地が利用されています。

それはこの一帯の地形発達史から読み解くことができます。札幌市街地は豊平川がここ 1 万年ほどの間に形成した札幌扇状地に発達しています。JR 函館本線のあたりが扇端ですが、そこから北側は三角州堆積物となっています。*2 北 15 条あたりでも、地下 1.5m に 20～30 ㎝の砂礫層が確認されていますが次第に北へ行けば行くほど粒度は細かくなりシルト（砂と粘土の中間くらい）や粘土層が厚くなります。

一方、それよりさらに北側の烈々布一帯には泥炭地が分布します。ヨシやアシを主とする低位泥炭層（水深の深いところで形成される）で層厚は 60～400 ㎝もあります。北海道では約 10 年で 1 ㎝の泥炭層が形成されると考えられるので、4,000 年近い年月がかかったことになります。これは今からおおよそ 6000 年ほど前に、地球の温暖化が進み平均気温で現在より 2 ℃ほど高かったと推測されています。そのため海水面が上昇し、現在の海岸線から 5 ～ 6 ㎞内陸まで海岸線が

前進していました。これを縄文海進といいます。その時の海岸線に形成された砂丘が札幌市と石狩市の境界あたりに発達していて紅葉山砂丘です。最高点で 18.5m、最大幅 1 ㎞、延長約 15 ㎞にもおよぶ国内最大級の内陸砂丘です。

つまりこのころ烈々布周辺は、この砂丘によって海への出口をふさがれた沼沢地となっていたのです。その間ここに流れ込む諸河川が運びこむ砂や泥が少しずつ堆積し、より粒度の細かい粘土層も形成されていきます。その間若干の隆起運動もあって南側から次第に陸化していきました。泥炭地は、そんな中でも最後まで沼沢地としてとり残された場所です。水鳥には最適な場所だったでしょうが、入植し開墾を進めようとした人々にとっては最悪の土地ということになります。東豊線栄町周辺などはそんな地域だったのです。大学村のあたりは排水性の悪い粘土層で泥炭地同様農耕地として利用するためには排水事業と土壌改良が必要となります。つまりこの地域の開墾の闘いは寒さとの闘い以上に、土との闘いだったと言えそうです。これは地域の違いを問わず北海道開拓全体に共通したことでした。

３．旧北大第三農場と大学村

札幌農学校（現北大）にとって、農場経営は学校経営の経済的基盤を支える重要な手段でした。1890（明治 22）年に北海道庁から土地を取得し農場の開墾が始りました。当初は資産管理上の法的な問題から農学校同窓会第二農園としてスタートし、5 人の小作者が入植しました。1896（明治 28）年には北大第三農場に改編され、1904（明治 36）年には現在の北 20 条から北 49 条、東 1 丁目から東 8 丁目までの南北に細長い広大な農場が完成しました。1901（明治 42）年には、農場の開墾を記念して、当時の総長佐藤昌介、附属農場長長南鷹次郎の書による開墾記念碑が、管理事務所のあった北 26 条東 1 丁目に建立されました。それには南組長馬場慶太郎、北組長豊田藤吉ほか、53 名の小作者の名が刻まれています。1960（昭和 35）年に北 26 条東 3 丁目の大学村の一画に移設され、閑静な住宅街の中にひっそりとたたずんでいます。（写真５.）

1948（昭和 23）年、農地改革によって農地は小作者に解放されました。昭和 30 年代まではジャガイモ、トウモロコシ、野菜類などを生産する畑作や小規模な酪農などが展開される純農村的な景観を残していましたが、次第に南側から市街地化の波にのみこまれて行きました。昭和 30 年代以降の急激な都市化の進展とともに、その後農業を継ぐ者もなく、40 年代中ころには完全に農村的景観は消失してしまいました。

しかし、都心から近く、東 1 丁目（石狩街道）通と東 8 丁目通のバス路線を中心に交通の利便

性が高かったことから、当初の入植者の定住率は比較的高く、現在もその 2 代目、3 代目、中には 4 代目へと移行している世帯もあります。多くは広い敷地の中に比較的大きな家屋を所有しているのが共通の特徴で、農業倉庫やサイロなど農業の残象を伴う所もあります。また近くにアパートや小型のマンション、駐車場などを経営している場合も見られます。

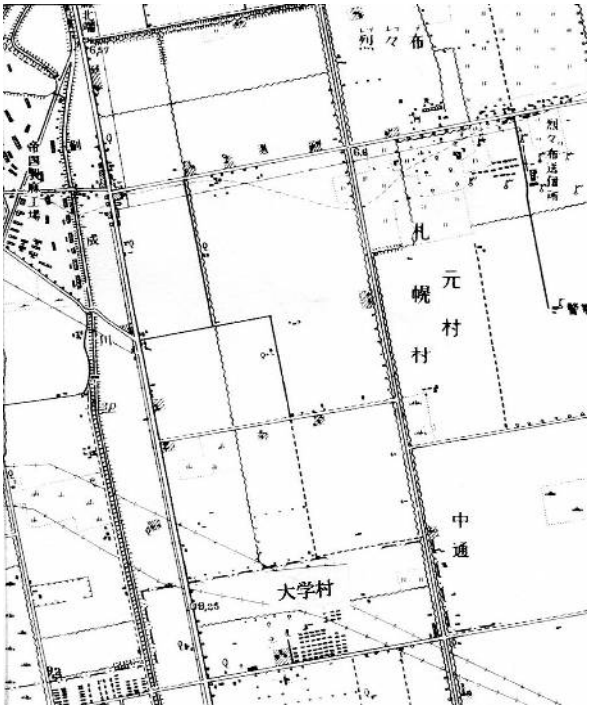

図２．昭和 25 年版地形図　25000 分の１（大学村加筆）

大学村は 1950（昭和 25）年に、北 26 条から北 27 条、東 3 丁目から 5 丁目の地区に 75 戸の木造家屋が建設されたことに始ります。この年 GHQ の占領からは独立するものの、まだまだ戦後の混乱の中にありました。住宅事情も逼迫しており、住宅の供給は緊急の都市的課題でした。大学村の住宅は進駐軍の解除資材などを利用して建設され、建設費が当時で 10 万円ほどだったことから「10 万円住宅」とか「文化住宅」などと呼ばれ、北大関係者が多く入居してきました。アイヌ語研究で有名な知里真志保博士、丹羽貴知蔵元北大総長や小林富士夫元室蘭工業大学長など著名な学者もこの地区の住民でした。この地区も含めて一帯は国有地のまま宅地開発がすすめられ、近くには二軒長屋の国家公務員公宅や国家公務員アパートなども建設されていきます。現在は建て替えられた数棟の国家公務員アパートのほか、法務省の研修施設などもありその名残をとどめています。（写真１．）

写真１．法務総合研究所と国家公務員アパート

また北 26 条東 3 丁目には北大附属の大学村幼稚園が建設され、地区に小中学校が建設される昭和 30 年代中ごろまでは、ここで地域をあげての運動会が行われるなど地域住民の交流の場となっ

ていました。このほか北 27 条東３丁目の南西角には食品や雑貨を扱う商店が立地し地域住民は「売店」と呼んでいました。その東隣には「大学湯」という公衆浴場が経営され、現在もそのまま営業を続けています。（写真 3.）今では「大学村」の地名をとどめるのはこのお風呂屋さんだけとなってしまいました。

もう一つ書き加えれば、この地区が道内生協運動の発祥地だということです。生協は 1957（昭和 32）年に北大生協としてスタートします。北大キャンパス内に店舗や食堂などを経営していましたが、1961（昭和 36）年に大学村内の北 27 条東 4 丁目に初めて、店舗面積わずか５～６坪の小さな学外店舗を開店させました。1965（昭和 40）年には札幌市民生協が北大生協から分離独立し、北 25 条東 3 丁目北東角に市民生協第 1 号店舗「大学村店」（現在は面積を縮小してコンビニが営業）（写真２)が開店し、1990 年代まで地域住民の生活を支えていました。

写真２．市民生協旧第一号店大学村店

写真３．大学湯と旧売店

４．都市化の波の中で

昭和 30 年代後半から 40 年代にかけての高度経済成長期に、札幌市の人口は爆発的な増加をしました。昭和 35 年に 61.5 万人だった人口は昭和 50 年には 124 万人へと倍増しています。何よりこの時代は一気に核家族化が進み、同時期に世帯数は 15.6 万世帯から 41.9 万世帯へと 2.7 倍にもなったのです。

この時期は、道内における札幌の政治的、経済的、文化的機能の中心性が加速度的に高まり、札幌一極集中型の地域構造が構築されました。道内の農山漁村から、若年層を中心に多くの人口を吸収することになりました。とりわけ、この時期はエネルギー革命の進行で空知地方を中心に道内の炭鉱が次々と閉山に追い込まれ、炭鉱労働者とその家族が大量に札幌へ流入しました。必然的に市街地は急速な拡大をはじめ、主要国道や幹線道路に沿ってほぼ同心円的に周辺の農地を

次々と飲み込んでいきました。

ＪＲ函館本線以北の地域では新琴似、屯田、篠路、元町、東苗穂などの市街地化が一気に進みました。その中でもとくに旧北大第三農場のあった地域は住宅地域として、ほぼ完全に市街化されました。国道 231 号線（通称石狩街道）と東 8 丁目通りに挟まれたこの地域は、当時北方向へと伸びる最も顕著な市街地化の発展軸となっていました。

1972（昭和 47）年に地下鉄南北線が開通するまでは、都心部へ向かう南北方向のバス路線が都市交通の中核でした。国道 231 号線と東 8 丁目通（通称北光線）がその幹線となっていて、これを東西に横断する幹線が北 26 条通と北 42 条通（通称烈々布街道）でした。いずれもドル箱路線で当時は市営交通が東 8 丁目通と北 26 条通を、民営の中央バスが国道 231 号線と北 42 条通を営業エリアとして路線を二分していました。

この地域の小学校の開校状況をみると、1957（昭和 33）年までは 1901（明治 34）年に開校した栄小学校（北 42 条東 10 丁目）の 1 校しかありませんでした。1957 年に大学村のすぐ南側に北園小学校（北 24 条東 5 丁目）が市街地化の北上に合わせて、栄小学校や幌北小学校、美香保小学校から分離して開校します。その後 40 年代から 50 年代前半にかけて 10 校以上の小学校が次々と新設されていきました。とくに栄町周辺には栄小学校を中心に「栄」の名のつく小学校が 7 校も新設されました。

写真４．東 8 丁目通（北 25 条）の様子

第 1 次ベビーブームの世代、いわゆる団塊世代がちょうど就学時期をむかえたことも重なり、まさに爆発的な増加でした。この時期は急激な児童数の増加に間に合わず、プレハブ校舎などで急場をしのがなければならない状況でした。

市街地の拡大に伴い学校はもちろんのこと、商店、飲食店、パチンコ店などの商業娯楽機能、公園、医院、郵便局、銀行など諸々の都市機能も分布していきました。

このころ、とくに東 8 丁目通には種々の商店や飲食店、パチンコ店のほか、銀行などの金融機関なども集積する市内でも有数の路線型商店街に発展していきました。（写真４．）道内では初めてスーパーマーケット方式（対面販売ではなく、レジで精算する方式）を採用する大型店舗が進出したのも東 8 丁目通でした。

1988（昭和 63）年に地下鉄東豊線が開通してから、東区の商業・金融機能などは東 16 丁目の地下鉄駅周辺に集中するようになり、相対的に東 8 丁目通の機能は低下しましたが、現在も依然として市街地を南北に貫く幹線道路の一つとなっています。

昭和 40 年代から 50 年代のころの大学村周辺では北 26 条通に立地した市民生協大学村店が住民の消費生活に大きな役割を果たしていて、この他には金物店、酒店、薬局、洋品店、雑貨店などの個人商店が不連続に立地する程度で商店街と呼べるほどの集積はありませんでした。

現在は、地下鉄南北線北 24 条駅と地下鉄東豊線元町駅双方に連接する北 24 条通に多くの商業機能が立地するようになり、北 26 条通は、やはり飲食店やいくつかの飲食・商業機能が不連続に分布するのみです。バス路線の運行本数も北 24 条通の 3 分の 1 ほどで今は北 24 条通の副次的機能を果たしていると言えます。

５．これからの問題

写真５．第三農場開墾記念碑とマンション

写真６．大学村周辺の建売住宅

昭和 30 年代、40 年代の急激な都市化の進展の中で、建築された住宅は築後 40 年以上経ったことで老朽化が進みました。なおかつ居住者の高齢化や世代交代もすすみ、新しく建て替えをしたり、マンションなどの集合住宅への転換も見られます。大学村周辺は持ち家として建築された個別住宅の比率が高く、敷地面積も 100 坪前後の広い敷地が目立ちます。今となってはとても贅沢な住宅地域でした。これを継ぐ２代目の年齢層も５０代後半から６０代にさしかかっていますし、3 代続けてこの地区に住み続ける世帯は非常にまれです。当然老人世帯の比率は高まり、独居老人世帯も多いように思います。かつての住民は土地を手放し、その資金で子供の居住 地の近くに転居したり、雪よけの心配のない都心のマンションや高齢者向け住宅などに移る人もいます。中には空家のまま放置されている家屋もあり、治安上の不安も指摘されています。したがって更

新された住宅であれマンションであれ、地域住民の多くは平成期に入ってから転住してきた世帯が多く、地域の歴史を知る人も多くはありません。

この地域は地下鉄駅へ連結するバス交通が市民の足となっていますが、地下鉄南北線北 24 条駅や地下鉄東豊線元町駅へはどちらもバス停で３つほどの距離にあります。近くには大型のスーパーマーケットや医療機関も多く、きわめて生活利便性の高い地域であることから、宅地としての需要も高く、地価は場所によっては坪単価 30～40 万円台と高値です。一般サラリーマンにとって、その宅地を購入し、かつ住宅を建築することは非常に困難です。そんな中でこれを仲介する不動産屋さんは比較的小さなマンションなどの集合住宅用に販売したり、あるいは土地を二分ないしは三分して建売住宅を建設する例もあります。（写真６）集合住宅の居住者は単身の若年層や逆に高齢の単身居住者いわゆる独居老人も多く、町内会などの地域的連携がうまく機能しなくなったり、迷惑駐車やゴミ出しのルールが守られずトラブルになることもあります。

市内どの地域にも、というか全国の都市社会において共通した課題となりますが、地域コミュニティとしての最低限の連携をどう構築し継続させていくのかが大切となります。とくに東日本大震災以降、防災や災害時の相互扶助など地域コミュニティの果たす役割が再認識されています。この地域では、周辺の原生植生の名残をとどめる「大学村の森」の環境保全整備に協力する市民活動として「大学村の森を守る会」が地道な活動を続けています。こうした活動の広がりや継続が、よりよい地域コミュニティ形成への「呼び水」となると期待されます。

写真７．　大学村の森公園

【　引用・参考文献　】

＊１　藤村久和　「広報さっぽろ北区版」　札幌市　1979（昭和 54）年 2 月号

＊２　瀬川秀良　「日本地形誌北海道地方」　朝倉書店　1974（昭和 49）年

山内正明　「フィールドノート　北大第三農場とその変貌」　地理教材研究シリーズ第 17 集第 35 回大会（札幌）報告　北海道高等学校地理教育研究会　2007（平成 19）年

竹内理三他編著　「角川地名大辞典　北海道」　角川書店　1987（昭和 62）年

北海道大学　「写真集　北大百年」北海道大学図書刊行会　1976（昭和 51）年

札幌地理サークル編　「北緯 43 度　札幌というまち」　清水書院　1980（昭和 55）年

札幌地理サークル編　「ウォッチング札幌　地図に映る 150 万都市」北海タイムス社　1987（昭和 62）年